

日刊 勤労千葉

82.10.22 No.1176

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六)・(公衆)三三三二七二〇七

警察労働運動に染まりきった 勤労「本部」革マル反動分子の醜態

おどろくべき 腐敗と憔悴!

勤労「本部」革マルのデッチ上げ告訴による「六・一二事件」第十一回公判は、十月十九日千葉地裁で開かれ、弁護側立証の証人として立った小倉、深見両氏は、極反動検事・佐々木のいやらしい反対尋問を毅然たる態度で打ち破り、警察「革マル」連合の実態を暴露しました。

オ11回・6.12デッチ上げ事件「公判

酒に酔って裁判所構内をふらつき、多量に東京地本革マル・山崎洋



「こんな裁判、酔っぱらってなけりやでできるか」(山崎)

まずわれわれは、今回の公判の中で、酒を飲んで裁判所に表われ、権力、警察官をバックに挑発し、あまつさえ勤労千葉組合員の追及に「こんな裁判酔っぱらってなけりやでできるか」と口走った勤労東京地本特執・「千葉地本」派遣担当・革マル分子山崎某を絶対に許すわけにはいきません。

「暴力事件」をデッチ上げ、権力に告訴し、六名を逮捕させ、三名を被告の立場においやりながら「こんな裁判……」とほざく勤労「本部」革マル分子を勤労千葉一三〇〇組合員と家族の怒りの闘いで必ずや一掃する!

反動佐々木検事の卑劣なやり口

公判の特徴は、反動佐々木検事が、「事件」とは直接関係のない問題で執ように追及し証人の混乱を狙うという悪らつな手口を使ったことです。

すなわち、小倉証人に対しては、証人が「六・一二事件」当日グラウンド不良で中止となった勤労千葉主催の野球大会会場から、津田沼電車区へ引き返した事実問題にふれ「どこの球場か」「何チーム参加したか」「責任者は誰がいたか」「トーナメントカリグ戦か」「二試合目で準決勝とおかしい」などと執ように証言をつきくずそうとしました。

弁護側から本件との関連性が追及されると、佐々木は「証人の証言の信ぴょう性を確かめるため」などとうそぶき、裁判長にたしなめられるとあせり「本当は球場へ行かなかつたんじゃないのか」と本音をもらしました。

「球場へ行った」公然たる事実すら、決して信用しやうとしない権力の恐るべき人間労働者蔑視の思想をばからずもみることができました。

しかし佐々木の目論見も小倉証人の「一回戦は不戦勝でした」との証言により粉碎されたことはいうまでもありません。

権力・革マル連合の実態を暴露

そして次には、「六・一二」の数日前の小倉証人と嶋

田のやりとりを具体的にもち出し、嶋田に暴力をふるったかのような追及を行い、革マル嶋田が権力に泣きつきデッチ上げの談合を行った権力・革マル連合の事実をはしなくも暴露しました。

さらに小倉証人が「六・一二」当日「嶋田の肩を押し足でか」「何回か」などくり返したうえ、「片岡が肩をに手をかけて押したのか」との主尋問と重複する尋問を行い、弁護側の異議により裁判長から注意をうけるなど嘲笑をかけたのです。

これに合せた佐々木は、「証人は逮捕されましたね、そのとき一緒にいたのは誰か」などと尋問し、傍聴席から「自分で逮捕しておきなから逮捕されたとは何だ」と抗議の声が起こり、弁護側の「本件とは関係ない」との異議が認められるや興奮し、「裁判長、傍聴席で妨害しているので退廷させてください」とどなり、またもや醜態をさらしたのです。

佐々木の目論見をうちくたく

深見証人に対しても同様のやり方で反対尋問を行いました。

すなわち「六・一二」当日津田沼電車区での健康診断なるものをとりあげ「健康診断をうけたどうか」「どの位の時間がかかったか」など、証人が「記憶してない」と証言しているにもかかわらず執ようにくり返しました。

再び弁護側に関連性を追及されると「証人の記憶の正確性を確認するためだ」と卑劣なやり方をかくそうと開き直ったのです。

公判は、小倉・深見両証人の終始一貫した証言により、佐々木の「証言」引き出しの目論見を見事に打ちくだき、教育会館における総括集会をちとり公判闘争を終了しました。

次回公判は、十一月二五日に開かれ、深見証人への反対尋問と検部証人が弁護側立証を行います。

「六・一二」公判もいよいよ山場を迎えますが、全力をあげて全員無罪をかちとろうではありませんか。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃せよ!